＊《研究遍歴》＊＊

都留の風景と共に歩む、環境教育の新たな道

田開寛太郎
（地域社会学科　准教授）

＊＊

日本の環境教育の歩みは、1950 年代後半の高度経済成長期において、自然破壊や公害の深刻化を背景に、自然保護教育や公害教育として始まった。その特徴は、時代ごとの社会状況と深く結びつきながら発展してきた点にある。そして現在、気候変動の危機をはじめとする持続可能性への課題が顕在化する中、環境教育の進化形として ESD（持続可能な開発のための教育）が確立され、その重要性が一層高まっている。

私が環境教育と出会ったのは、2009 年 12 月のことである。当時、リーマンショックの余波で就職難に直面し、将来への明確なビジョンも持てないまま日々を過ごしていたと記憶する。そのような中、「何か新しいことをやってみよう」という軽い気持ちで応募したのが、公益財団法人キープ協会環境教育事業部の長期実習プログラムであった。振り返ってみると、あの一歩こそが私の人生の大きな転機となったと思う。本稿では、その瞬間から現在に至るまで、環境教育を通じて出会った人々や学びの軌跡を、読者の皆さんと共有したい。

1．研究の出発点、キープ協会での学び

2010 年 4 月 1 日、実習生としての初日を迎え、スタッフとして参加した 2 泊 3 日の子どもキャンプは衝撃であった。大学生の頃、YMCA の野外ボランティアリーダーとして幼児から高校生まで幅広い年齢層を対象にした野外活動の経験が、ここでは通用しなかったのである。「郷に入っては郷に従え」とは言うが、単に子どもを自然の中で遊ばせるだけでは不十分で、これまでのやり方に固執してはいけないことを痛感した。そして、キープ協会が重視する「人と自然」「人と人」をつなぐといった理念に触れ、それまで漠然としていた「環境教育とは何か」という大きなテーマを深く考え続ける日々が始まった。

さて、キープ協会の実習プログラムは、基本的には OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）であった。環境教育指導者に必要な知識や技術を習得するだけでなく、ビジターセンターの施設運営や展示作成、個人・団体向けの事業企画など、環境教育に関する幅広い考え方や視点の基礎を築くことができた。また、インタープリテーション技術を活用したガイドを一般の観光客を対象に実施するなど、実践的な学びの場が豊富に用意されていた（写真 1）。さらに、キープ協会主催の「森療時間」や「つなぐ人」、パタゴニア主催の「草の根活動家のためのツール会議」など、多岐にわたる研修や交流事業に参加する機会も十分であった。これらの経験を通じて培ったノウハウは、現在の大学の仕事にも生かされ、かけがえのない財産となっている。

写真 1　インタープリテーションガイド実践

また、キープ協会での「人」との出会いは格別で、私にとってその後の進路を決定づけるうえで幸運であった。川嶋直先生（当時・キープ協会常務理事／立教大学異文化コミュニケーション研究科特任教授）からは、「神は細部に宿る」と教えられ、一事が万事であることを気づかせてくれた。また、先生の著書『就職先は森の中：インタープリターという仕事』（1998 年、小学館）は、この業界では広く知られているが、「環境教育」を仕事にすることへの揺るぎない信念と情熱の深さを肌で感じることができた。

ほかにも、立教大学の阿部治先生（現・公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長）のゼミ合宿に同行させていただいた経験は印象的で、環境教育に励む学生たちの熱気に触れたことは、大きな喜びでもあった。当時のゼミ生であった加藤超大君（現・公益社団法人日本環境教育フォーラム事務局長）とは、環境教育関連の仕事でご一緒する機会があり、環境教育の未来を共に語り合える数少ない同志の一人である。

そして何よりも、湊秋作先生（当時・やまねミュージアム館長／関西学院大学教育学部教授）からは、研究の奥深さや面白さを教えてもらった。清里周辺の森に設置された巣箱調査をはじめ様々な活動に参加させてもらい、特にキープ協会主催の「やまね学校」は思い出深く、ヤマネに熱中する参加者と共に調査を行った経験は忘れがたい。湊先生は多忙で清里を不在にすることも多かったが、その間、やまねミュージアムのスタッフ兼研究員であった岩渕真奈美さんと饗場葉留果さんから多くの気づきを得た。お二人は日常業務をこなしながらも、身を削るように研究に没頭する姿が非常に魅力的であり、その精力的な姿勢から学ぶことは今もなお多い。

2．修士課程へ、富山県立大学での学び

キープ協会の実習を修了した後、環境教育の仕事を求めて郷里の富山に戻り、2012 年 4 月に富山県立大学環境教育支援室の環境教育コーディネーターとして勤務した。主な業務は、全学共通の必修教養科目「環境学」の講義運営や、学生のエコポイントに応じた資格認定制度の充実・整備を進め、学生が環境問題に「気づき」、関係者と「つながる」機会の創出に注力した。また、環境情報誌の発行や、地域や関係者との協働体制のもとエコツアーやひまわり大作戦といった環境教育プログラムを企画実施したほか、立山自然保全ボランティア活動（外来種除去）の立ち上げにも関わった（写真２）。特にこのボランティア活動は、当時工学部のみを有する単科大学としては画期的であり、現在も継続されているという。日々の教育研究業務で多忙な教員を巻き込み、協力を得ることの苦労もあったが、環境リテラシー教育モデルの定着や、学生の環境意識の変化を実感できたことは良い経験となった。

写真２　学生の自主的活動を支援する（立山自然保全ボランティア活動の様子）

2013 年 4 月、環境教育コーディネーターの任期を終え、支援室の運営委員で大学院工学研究科環境工学専攻教授の九里徳泰先生（現・相模女子大学大学院 MBA 社会起業研究科教授）の研究室の扉をたたき、修士課程に進学したのは自然な流れであったように思う。九里先生は経営学を専門とし、環境経営分野で環境教育の新たな領域を切り拓くとともに、サステナビリティ・マネジメント、持続可能な観光、女性の社会進出といった、時流に乗った多彩な研究を行っている。

九里研究室では、富山市ファミリーパーク（動物園）にサテライトラボを設置し、富山市環境

未来都市フィールドミュージアム構想の一環として、関係機関と協力しながら環境教育を推進することが最初のミッションであった。この成果は、2014 年 11 月に名古屋で開催された ESD に関するユネスコ世界会議で発表した。また、高等教育機関における ESD 推進フォーラムや全国エコツーリズム学生シンポジウム（日本航空株式会社協賛）への参加に加え、活動資金の獲得についての指導も受けながら、総務省「富山県南砺市『域学連携』地域活力創出モデル実証事業」、地球環境基金「富山県全域における ESD 活動の実施と普及啓発」、セブンイレブン記念財団「環境リーダー人材による呉羽丘陵の環境学習活動的活用の推進」などのコーディネートを務め、実践的なスキルを深めることができた。

九里先生からは、「目の前に２つの道があったら、険しい方を選びなさい」と教えられ、私は与えられた課題に一生懸命に取り組んだ。自然科学の基礎知識を振り返り、新たに学んだ工学分野の理論を身につけるのに苦労しながらも、現場での気づきを大切にし、知識と実践を結びつける中で、真に価値ある成果を生み出す大切さを学んだ。そして何よりも、社会の実態を踏まえた独自の研究テーマを見出し、自ら研究資金を獲得するといった、研究者としての基礎的な体力をつけることができたと思う。

３．博士課程へ、東京農工大学での学び

思い返してみると、修士課程の時、2014 年４月 14 日から５月７日までの約３週間にわたるアメリカの自然学校「Teton Science School」への短期留学をしたことが、博士課程への進学を強く意識するきっかけとなった。この留学は、安藤百福記念アウトドアアクティビティセンター（長野県小諸市）が実施した「浅間学生セミナー」において、研究発表やディスカッション能力などが総合的に評価され、石山雄貴君（現・鳥取大学地域学部准教授）と共に派遣されたものである。なお、このセミナーは現在実施されていないが、2016 年までに計６回開催され、環境教育や野外教育の専門家を目指す学生たちが交流する場として非常に貴重であった。

さて、修士課程の修了年度、私はそのまま九里先生のもとで博士課程に進学しようと考えていたが、その年に九里先生が相模女子大学に移ることを知り、さすがにその困難な道を強引に進むこともできなかった。そのような折、アメリカでの短期留学中に石山君からゼミの様子や研究のことを聞いていたので、急いで東京農工大学の朝岡幸彦先生（現・白梅学園大学子ども学部特任教授／元日本環境教育学会会長）にアポイントメントを取った。

その後、幸いにも、スムーズに朝岡先生の研究室への進学が決まった。2015 年４月に東京都府中市に引っ越し、初めての東京生活には不安もあったが、それ以上に、環境教育の分野で知らない人はいない朝岡先生のもとで学べることへの期待と興奮が大きかった。

しかし、東京農工大学での学びは決して平坦な道ではなく、時には多くの選択肢が錯綜し、迷うことも少なくなかった。朝岡先生のモットー（特技）である「友だちに頼みごとをすること」のもと、研究室には様々な「人」が行き交い、定例ゼミや自主ゼミにも多様な専門分野の先生方が関わられた。国際環境教育ゼミでは降旗信一先生（東京農工大学教授／日本環境教育学会会長）、環境思想ゼミでは澤佳成先生（東京農工大学講師）、大倉茂先生（東京農工大学講師）、社会教育ゼミでは故・千野陽一先生（東京農工大学名誉教授／元日本社会教育学会会長）など、多くの先生方から各分野の理論を学ぶことができ、そのおかげで論理的思考力はずいぶん鍛えられたと思う。

唐突ではあるが、朝岡先生のお気に入りの言葉で印象的なのは、山頭火の「振り返らない　道を急ぐ」である。朝岡先生はまさにこの言葉のとおり、アグレッシブに様々なことに取り組み、着実に前進するその道についていくことで必死だった。与えられたものは何でも吸収しようと、口伝研究会（杖道の稽古）やロングトレイルを歩く会などにも参加し、非常に充実した時間を過ごすことができた。特に、北根室ランチウェイ（通称

KIRAWAY）や塩の道トレイル（糸魚川～松本）をふたりで歩いたことは感慨深い。北海道の山中では、熊が嫌がる音と言われる（？）ペットボトルを「ベコベコ」と鳴らしながら歩いたのは良い思い出であるし、糸魚川からの急勾配の峠越えは本当に辛かったが、乗り越えた時の達成感は今でも忘れられない（写真３）。

いま朝岡先生は東京農工大学を定年退職後、新たな職場で「DX」や「GX」をキーワードに、保育・幼児教育の分野における革新的な環境教育の構想を描いている。新しい分野に意欲的に取り組みながらも、一歩一歩着実に成果を積み重ねるその後ろ姿は、私にとって大きな指針であるし、これからも先生の背中を追い続けることが楽しみである。

写真３　塩の道トレイル（最大難所の大綱峠越え）

４．環境教育の根幹を見つめ直す、コウノトリとの共存から学ぶこと

博士論文では、コウノトリの野生復帰や生息地である湿地をテーマに、環境教育の研究に取り組んだ。かつて日本で絶滅したコウノトリは、2007年に放鳥後初めて野外での巣立ちが確認され、その後、野外での個体数は増加を続け、2015年には200羽を超え、現在では470羽近くに達している。しかし、野生復帰が進む一方で、餌不足やテリトリーの重複、雌雄比のアンバランスによる近親婚のリスクが新たな課題として生じている。さらに、雌同士のペア形成、雄個体を巡る争いやヒナ殺しといった行動も観察されているという。このようなコウノトリの「内部世界」における歪な行動やその背景にある市民の思いについては、佐竹節夫氏の著書『コウノトリと暮らすまち：豊岡・野生復帰奮闘記』（2023年、農山漁村文化協会）に詳しく記されている。野生復帰を支える地域住民の努力や葛藤が描かれており、私自身も多くの示唆を得ることができた。豊岡市での研究調査を通じて、佐竹氏をはじめ多くの方々には大変お世話になっており、ありがたいことに、その出会いの一端が同書で紹介されていることは素直にうれしい。

さて、博士課程当時、私の関心は単にコウノトリを「知る」ことにとどまらず、「コウノトリとの向き合い方」を深く考え、「学ぶ」ことに向けられていた。これは、朝岡先生が研究された「農民が牛をどう飼うか（マイペース酪農）」の考え方にも通じるものであり、コウノトリの野生復帰に携わる市民もまた、学びながら工夫を重ねる姿勢が求められていると感じていた。野生生物であるコウノトリを「飼う」という発想を直接研究することはできなかったが、市民が自然と科学の狭間で直面する不安や葛藤に寄り添いながら、コウノトリとの共存に向けた環境教育の在り方を模索した。

また、博士論文で取り組んだ研究プロセスは、特定の年齢層に限らず、あらゆる人の学びを中心に据えたものへと焦点が絞られ、これからの持続可能な社会を構築するための思考の基盤へとつながったと思う。コウノトリとの共存に関わる課題は「複雑」で、「厄介」でもあり、そして「多面的」でもあるため、現代の複雑化する社会課題に対応するためには、環境教育を次のステージへと深化させる必要があることを強く意識している。現在、動物園や博物館などの社会教育施設に対する関心が一層強くなっており、本学の授業では獣医師や学芸員の方々をゲストスピーカーに招き、できるだけ具体的な事例や体験談を学生に語ってもらうことで、私自身も多くの気づきや発見を得ながら、新たな知の創造に努めている。

2024 年 12 月、韓国仁川広域市教育庁 AI 融合教育課生態転換教育チーム（小中高の教師 13 名）と共に、栃木県小山市のラムサール条約登録湿地「渡良瀬遊水地」における教育実践や、コウノトリの野生復帰の現状を視察した（写真 4）。韓国では現在、2022 年に「環境教育の活性化及び支援に関する法律」が施行され、環境教育都市の指定を通じて、環境教育を核とした持続可能な地域・自治体づくりを進めようとしている。また、ICT を活用した教育の形を模索しつつ、自然体験活動を基盤とした環境教育の在り方を追求することが重要な課題であるという。なおこれらの課題は、日本でも「環境教育等促進法」に基づく基本方針で強調されており、日韓双方に共通するテーマである。今後、国際交流を通じて環境教育の新たな方向性や教材・教具の開発について議論を深め、相互に学び合うネットワークの構築に取り組んでいきたい。

写真４　渡良瀬遊水地の視察

５．おわりに

本学のように環境教育を専門としたゼミが開かれ、卒業論文を必修としている大学は、私の知る限り多くはない。本学の前学長である故・下泉重吉先生は、自然保護教育の推進に尽力し、環境教育分野で広く知られているが、湊秋作先生（都留文科大学文学部初等教育学科卒業、現・一般社団法人ヤマネ・いきもの研究所代表理事）の恩師でもある。私にとっても深いご縁を感じるとともに、その後、今泉吉晴先生、そして高田研先生へと引き継がれ、環境教育研究が脈々と受け継がれてきたことを実感する。そして今、自分もその歩みの上に立っていることを考えると、身の引き締まる思いがする。

ところで、下泉先生が亡くなった後、故・青柳昌宏先生（日本自然保護協会元事務局長／自然観察指導員制度の創設者の一人）が、自然保護教育・環境教育の理念を継承しながら、湊先生にヤマネ研究の指導を続けたという。湊先生からは、青柳先生との思い出として、「研究を続けていると、霧が晴れるかのように見えるときがある」と語り合ったことを教えてもらった。この言葉には、科学の探究が終わりのないものであること、そして未知の領域に踏み込む際の不安も込められていると思う。それでも、失敗を恐れず、新たなことに挑戦し続けることこそが、学びの本質であることを教えてくれる。

こうした諸先生方が築いてこられた確固たる基盤の上に立ち、私もまた、小さなことでも自分にできることを誠実に取り組んでいきたいと決意している。着任早々、大変光栄なことに「都留市教育振興基本計画策定委員」に任命され、意見を述べる機会を得た。ESD を視野に入れた環境教育の推進、体験活動を基盤とした幼保小連携の促進、幼保教育研究の質向上のための協力体制の強化、さらには動植物とのふれあいを通じた直接体験や動物園教育などの充実について意見を述べさせていただいた。昨今、教員の働き方改革が叫ばれる中で、多忙な教員の皆様に新たな課題を示すことには多少の心苦しさを覚えるが、より良い教育環境を共に築いていけると信じている。「言うは易く行うは難し」とはよく言われるが、自らの役割を見極め、地域に根ざした大学としての役割を果たしながら、環境教育の発展に向けて努めていきたい。そして、必要な環境整備や協働を着実に進めながら、これから出会う学生の皆さんや実践者の方々と共に、環境教育の新たな道への一歩を踏み出していきたい。